

クリシュナーチャールヤ作— 『吉祥なるチャクラサンヴァラの成就法』 訳

杉木 恒彦

本稿は筆者が以前『智山学報』vol.49, p.45-62.(2000年)に掲載した「Kṛṣṇācārya's Śrīcakrasaṃvarasādhana — Critical Edition with Notes —」の中で発表した Kṛṣṇācārya (以下、クリシュナ) 作 Śrīcakrasaṃvarasādhana (以下、『吉祥なるチャクラサンヴァラの成就法』あるいは CS) の梵本校訂テキストの試訳である。様々な他文献に見られる、本テキストとパラレルになっている (あるいは関係の深い) 箇所は、本テキストが持つ文献史上の位置、そしてそこに説かれる脈管理論史上の位置については、すでに同論文の中で述べたので、ここでは詳細を省こう。

本書はそのタイトルの通り、(1) チャクラサンヴァラの成就法、別の言い方をすればチャクラサンヴァラの伝統におけるヘールカ曼荼羅の成就法を説くことを主とし (校訂テキストに付した整理番号 [1-47]), その他に (2) ヴァサントティラカー、四輪およびもろもろの脈管についての教示 ([48-63]), そして (3) 十個のもの (daśadravya, つまり十個の文字) を用いた観想 ([64-66]) の、大別して三つの項目を含んでいる。詳細については試訳とそれに付した注をご覧いただきたい。

ここでは、(1) のヘールカ曼荼羅の成就法の箇所について、その大まかな構成を述べておきたい。その内容はさらに大きく三つに分けることができる。

(I) 「初めの瑜伽という名の三摩地 (ādiyogo nāma samādhīh)」 [1-28]

: 外のヘールカとヴァーラーヒーが完成する

(II) 外と内の三十七尊曼荼羅の同時完成 [29-46]

: 外と内の三十七尊曼荼羅が同時に完成される

(III) 三十七菩提分法としての三十七尊曼荼羅の浄化相の完成 [47]

: 外と内の三十七尊が三十七菩提分法として浄化される

チャクラサンヴァラ系密教の諸流派の始祖たちが想定するヘールカ曼荼羅は、(1) 外の曼荼羅、(2) 内の曼荼羅、(3) 三十七菩提分法としての曼荼羅の三種の形態を持ち、それら相互の関り方は成就者たちによって相違がある (拙稿「サンヴァラ系密教諸流派の生起次第」『東京大学宗教学年報』XIV, p.59-79., 1996年を見よ)。このクリシュナの場合は、(1) と (2) は同時生起され、それらが最終的に (3) として浄化される構成になっている。

ところで [a] 「初めの瑜伽という名の三摩地」の名がこの成就法に登場するが、三三摩地 (trisamādhī) の分類として当然予想される残りの二つの三摩地 (「最勝曼荼羅王 (maṇḍalarājāgrī) 三摩地」, 「最勝羯磨王 (karmarājāgrī) 三摩地」) の名称は登場しない。クリシュナはこれら二つの三摩地の名を何らかの理由で採用しなかったのか、あるいは彼の時代には (少なくとも) 彼を取り巻く宗教伝統の内部にその分類は伝わっていなかったのか。

前述の二つの拙稿の中で筆者がこの成就法の強い影響下で作成されたと指摘した Kalākapa-da 作 Śrīvajraḍākanāmamahātāntrarājoddhṛtasādhānopāyikā bodhicittāvalokamālā (以下, VDUS, Ota.2218) には、「初めの瑜伽という名の三摩地」(Ota.279b5)と「最勝曼荼羅王三摩地」(Ota.283b3)の二つの名称が登場する。しかし、第三番目の三摩地の名称は記されていない。この点を考慮するならば、クリシュナの伝統の中では三三摩地の分類は未分化のものであった可能性が高い。

また、— 話をクリシュナの『吉祥なるチャクラサンヴァラの成就法』に戻せば — 「初めの瑜伽という名の三摩地」の内部には、「セヴァー(親近, sevā)[23]」「ウパサーダナ(近成就法 upasādhana)[24]」「サーダナ(成就法 sādhana)[25]」の三つの構成成分の名称が見られる。だが、当然予想される第四番目の成分である「マハーサーダナ(大成就法 mahāsādhana)」の名称は述べられない。VDUS においては、「ウパサーダナ」と「サーダナ」の名称しか確認できない(Ota.279a3)。四支の分類も、クリシュナの伝統の中では未分化のものであった可能性がある。

.....

本テキストには隠語(象徴語)が多分に使用されている。これは何もクリシュナ独自のものではなく、チャクラサンヴァラの聖典解釈の伝統の中で生じたある程度一般的な現象である。つまり、チャクラサンヴァラの伝統は『チャクラサンヴァラタントラ(Śrīcakrasaṃvaramahāyoginītantra)』(=『ヘールカアビダーナタントラ』(Herukābhīdhānatantra))から始まるのであるが、このタントラの大部分は性瑜伽やマントラ念誦や呪術的媒体物の作成などに基づく世間的な実践を説くものであった。だが時代が下ると、それらの世俗的な実践を説くそれぞれの文章、単語を隠語と解釈し直し、そこに出世間的な実践を(ある意味強制的に)読み込む動きが登場する。その動きの中にあつたものの一つが、クリシュナの伝統だったのである。その結果、本成就法に記される文章で特に『チャクラサンヴァラタントラ』に由来するものは、隠語を多く含むものとなっているのである。この問題については前述『智山学報』拙稿の中でも少し論じているので、参照されたい(p.46)。

.....

今回の試訳では以下のような方針をとった。

- ・ 隠語は「」付きで訳し(たとえば‘矢’等)、その意味するところは注の中に記した。
- ・ 全体の訳をいくつかの小見出しによって区分したが、これは便宜上のものである。
- ・ [1-2][3][4]等の数字は、校訂テキストに付した整理番号に対応している。
- ・ 注の中に記した Note (I)(II)等は、校訂テキストに付した Note 番号に対応している。
- ・ 校訂テキストおよびその Note の中ですでに述べたことは、煩瑣を恐れ、今回繰り返し述べることをしていない。校訂テキストおよびその Note を見ながら今回の試訳を検討して頂ければ幸いである。
- ・ 注の中で用いた略号は前述の智山学報論文のものと同じである。

吉祥なるチャクラサンヴァラの成就法

クリシュナーチャーラヤ

[帰敬偈]

オーン 仏に敬礼します。

死人の座に住し、眼が三つあり、全ての側に顔があり、赤っぽい体のヴァーラーヒーを根本の二本の腕で[抱き]、瞬時に引き裂かれたナーガの主を他の二本[腕]で[握り]、残りの四本の左腕でカトヴァーンガ杖と索と人間の[頭]とブラフマンの頭を[持ち]、[残りの四本の]右[腕]でカルトリ包丁とトリシューラと斧とダマル太鼓を持つ、ヘールカと呼ばれる者に敬礼してから、彼の成就法を私は語ろう。[その成就法は]異国の言葉で秘されたものであり、チャクラサンヴァラの秘密の意味[を蔵するもの]であり、成就のためのマントラの集成である。[1-2]

[如来たちへの供養～器界観]

[自分の]心臓の月[輪]の種[字]から[発せられる]光線のもろもろの集まりによって[自分の]面前に引き寄せられた善逝たちを、あらゆる供養によって恭しくもてなしてから、三宝などを彼は唱えるべきである。[3]

全ては空であると観想してから、雑色蓮華と日[輪]と金剛杵とフーン字を[観想し]、荼枳尼たちのもろもろの集まりを出現させ、賢者は杭など[の儀軌]を行うべきである。[4]

賢者は虚空界に思念するべきである。四元素の観想を[行うべきである]。なぜなら、全ての元素の集合によって一切の容器が生じるからである。これがその次第である — ‘矢’から、‘残余物[あるいは灰]’⁽¹⁾と‘干からびた頭[あるいは濡れた頭]’⁽²⁾と、‘牛舎の青蓮華’がある。‘亀’の‘壊れざるもの’、‘大貝より成るもの’を彼は作るべきである⁽³⁾。[5-6]

[白色の金剛サッタ⁽⁴⁾と般若の生起]

顔は四つ、腕は四本あり、同様に腕は十万本に至るまであり⁽⁵⁾、白色の体で大いに怒り、金剛杵と鈴[を持つ腕]で[妃の]身体支分を抱擁し、カパーラの環を身につけ、灰を体に塗り、口を開いて少し牙を見せ、人間の死体で作られた座[に住し]、仏たちの光線の大雲をあらゆる方角に発し、体を六つの象徴物で飾り、頭冠を戴く勇者を[彼は観想するべきである]。[その勇者の]右の顔は黒い。左[の顔]は赤く、恐ろしい。根本の顔は大いに白い。後[の顔]は金色に輝いている。そして時間と死を克服し、支分にカトヴァーンガ杖を持ち、そして閻伽水の器であるカパーラを[持ち]⁽⁶⁾、顔に武器をつけている[その勇者]を[観想するべきである]。[7-11]

彼の般若は大いに恐ろしく、[骨の]破片で飾られた腰帯をまとい、腸がつまったカパーラを[持ち]、その色の武器を持っている。[12]

[曼荼羅が生起する場所についての教示]

‘山’、‘密林’、‘藪’、‘大海の岸辺’、‘最初の成就の尸林’⁽⁷⁾、それらの場所で彼は曼荼羅を描くべきである⁽⁸⁾。[13]

[法身の観想]

‘和合’を（なすべきである）。「金剛鎖」は和合になる[→を生じる]⁽⁹⁾と言われる。‘金剛杵’によって‘蓮華’を彼は貫くべきである。続いて、‘孔雀の羽’のように彼は揺れ動かすべきである。まさしく‘鉤’によって彼は引き寄せるべきである。震わす時は‘杵’による。続いて、まさしく‘金剛’と呼ばれるものを、彼は正しく‘口’の中に広げるべきである⁽¹⁰⁾。[14-15]

‘射矢’と結びつけてから、[持金剛は]明妃とともに液体になった⁽¹¹⁾。‘摩擦されるべきもの’と‘摩擦するもの’の結合により、法身のように[あるだろう]⁽¹²⁾。[16]

[ヘルカとヴァーラーヒーの誕生]

全ての仏たちが集会をなして瞬時に‘私’⁽¹³⁾を勧請した —

オーン 大楽である金剛サッタよ。ジャハ フーン ヴァン ホーフ あなたは妙楽である。現れよ。ホー

と、世間界の楽を与える‘私’が勧請されただけで、[ヘルカとヴァーラーヒーの]自分たちのマントラが⁽¹⁴⁾自ずから生じんことを！続いて誕生の規則の順序通りに、アン[字]とフーン[字]から、持金剛が液体の形態より成長した。[17-18b]

[彼は]紺色で、大いに恐ろしく、赤い炎の光輪を持ち、顔が四つあり、大いに恐ろしく、腕が十二本あり、ウマーの夫を踏みつけ、日[輪]の座[に]住している。[彼の]根本の顔は大いに黒い。右[の顔]はクンダ花のよう[な色]である。左[の顔]は赤く、大いに恐ろしい。後ろ[の顔]は金色に輝いている。[彼は]以前のもろもろの武器を携え、眼が三つあり、プラティアーリーダ座法で住し、怒りと笑いの顔を持つ。[18c-21]

彼の般若はヴァーラーヒーである。[彼女は]赤色で、大いに燃え上がり、腕は二本、顔は一つであり、神聖であり、金剛杵と人間のカパーラを[手に]持つ。[22]

[セーヴァー]

世尊の四つの顔より加持がある —

オーン 窒息させよ。殺せ。フン フーン パト

オーン 捕らえよ。捕らえよ。フン フーン パト

オーン 捕らえさせよ。捕らえさせよ。フン フーン パト

オーン もたらせ。ホー 世尊よ。明呪王よ。フン フーン パト

左回りに[行うべきである]。

オーン 私は法界の自性を自体とする。

というのが、セーヴァー（親近）である。[23]

[ウバサーダナ]

オーン ハ：心臓における金剛サッタである。

オーン ナマ ヒ：頭における毘盧遮那である。

オーン スヴァーハー フ：頭頂における蓮華舞自在である。

オーン ヴァウシャト ヘー：両腋における吉祥ヘルカである。

オーン フーン フーン ホー：両眼における金剛日である。

オーン パト ハン：全ての支分におけるハヤグリーヴァである。[以上は] 武器である。

オーン ヴァン：臍におけるヴァジュラヴァーラーヒーである。

オーン ハーン ヨーン：心臓におけるヤーミニーである。

オーン フリーン モーン：額におけるモーヒニーである。

オーン フレーン フリーン：頭におけるサンチャーリニーである。

オーン フーン フーン：頭頂におけるサントラスィニーである。

オーン パト パト：女神の全ての支分に。

というのが、ウパサーダナ(近成就法)である。[24]

[サーダナ]

心金剛はフーン字となって心臓で月[輪]に住する。

オーン フリーヒ ハ ハ フーン フーン パト：喉における語金剛である。

オーン 吉祥なる金剛へ・へ・ル・ル・カン。 フーン フーン パト 荼枳尼たちの集会の最も優れた楽。スヴァーハー： 額における身金剛である。

オーン 金剛によって描かれるべき全ての仏と荼枳尼において。フーン フーン パト：女神の心臓に。

オーン チャウリー フーン フーン パト：[女神の] 喉に。

オーン 金剛毘盧遮那女において。スヴァーハー：[女神の] 額に。

頭にオーン字を、心臓にフーン字を、性器にアーハ字を、腰帯[の箇所]にスヴァー字を、両腿にハー字を[彼は観想するべきである]。

というのが、サーダナ(成就法)である。[25]

[智サッタ引入・灌頂・供養 — 初瑜伽三摩地のしめくり]

次に、持金剛は智慧と三昧耶が結合したものであるとここで言われる。灌頂の住居を瞑想してから、続いて供養を彼は始めるべきである。彼はマントラを双方の性器に結びつけるべきである⁽¹⁵⁾。[すなわち、]ア字を‘人の鼻’⁽¹⁶⁾に布置し、同様にヴァン字を[勇者の]性器の先端に結びつけてから、賢者は瑜伽女を摩擦するならば、健全な、浄化された身体が[生じるだろう]。[26-27]というのが、初めの瑜伽という名の三摩地である。[28]

[外と内のヘールカ曼荼羅を完成することについての教示]

オーン 私は一切如来への愛着である金剛の自性を自体とする。

心臓の種[字]から[発せられた]もろもろの光線によって善逝たちを引き寄せてから、同様に‘世俗を離れた住居’を眉間に置き、‘最初の音と結びつけられたもの’を瞑想してのち⁽¹⁷⁾、[それが]瞬時に燃え上がる。同様に旋火輪に乗った荼枳尼はさすらう。炎の環の海のような輪は全ての方向を向いている。勇者たちと荼枳尼たちに囲まれた、顔が四つある、勇者たちの主を[彼は観想するべきである]。[29-31b]

[勇者たちと荼枳尼たちは]タットヴァの区別に従って、いたるところにおいて、もろもろの脈

管の道に分けられる。マントラを保持する者は自分の望むがままに割り当ててから、もろもろの反対回り [の種字] を結びつけるべきである。加行のために、大いなる妙楽の曼荼羅を彼は完成すべきである。[31c-32]

[外と内の大楽輪の完成⁽¹⁸⁾]

荼枳尼たちは、全ての中で最上なるもろもろ [の場所] に [自分たちの] もろもろの住居を開く。東には白っぽい紺色に輝くダーキニーがいる。北には緑っぽい白色に輝くラーマーがいる。西には赤っぽい白色に輝くカンダローハーという荼枳尼がいる。右には白っぽい黄色に輝くルービニーがいる。これら全て [の荼枳尼たち] は、死体の上でカルトリ包丁とカパーラを手に持ち、髪を燃え上がるように逆立たせ、全ての装飾で飾られ、踊りながら住し、眼は三つあり、顔は一つある。[彼女たちの] もろもろのカパーラの中には、象・豹・人間・牛が順々にある。[33]

[四] 緯には五甘露 [が入った] 四つの頭蓋骨がある。[それらは] 仏像で飾られ、冠が載せられている。[34]

[外と内の心輪の完成]

プリーラマラヤ⁽¹⁹⁾である頭には、カンダカパーリンの [妃である] プラチャンダーがいる。[彼女は] 爪と歯を流れる。ジャーランダラである頭頂にはマハーカンカーラとチャンダークシーがいる。[彼女は] 髪と体毛を流れる。オーディヤーヤナである右耳にはカンカーラとプラバーヴァティーがいる。[彼女は] 皮膚と垢を流れる。アルブダである背骨にはヴィカタダンシュトリ⁽²⁰⁾とマハーナーサーがいる。[彼女は] 肉を流れる。[以上の者たちは] 東を始めとする [四] 方に左回りで [置かれるべきである]。

ゴダーヴァリーである左耳にはスラーヴァイリナとヴィーラマティーがいる。[彼女は] つねに筋肉を流れる。ラーメッシュヴァラである眉間にはアミターバとカルヴァリーがいる。[彼女は] 骨の環を流れる。デーヴィーコータである両眼では、ランケーシュヴァリーがヴァジュラブラバである肝臓を流れる。マーラヴァである腕のつけ根にはヴァジュラデーハとドルマツチャーヤーがいる。[彼女は] 胸の座より生じるもの [=心臓] を流れる。[以上の者たちは] 北東を始めとして、[四] 緯に [置かれるべきである]。[彼女たちは] 心輪の '虚空を行く女' たちであり、[勇者たちと] 結合しながら安住している。[35]

[外と内の語輪の完成]

同様に、両腋はカーマルーパにある。[そこでは] アンクリカとアイラーヴァティーがいる。彼女はつねに眼を流れる。オードラである両乳房にはヴァジュラジャティラとマハーバイラヴァーがいる。[彼女は] 胆汁を運ぶ。臍であるトリシャクニにはマハーヴィーラとヴァーユヴェーガーがいる。[彼女は] 肺を流れる。コーサラである鼻にはヴァジュラフーンカーラとスラーバクシーがいる。[彼女は] 腸の環を流れる。[以上の者たちは] 東を始めとする [四] 方に [置かれるべきである]。

カリंगाである口にはスバドラとシュヤーマデーヴィーがいる。[彼女は] 肋骨に⁽²¹⁾ 言われる。ランパーカである喉にはヴァジュラバドラとスバドラがいる。驢馬女 [である彼女] は胃を

流れる。カーンチーである心臓にはマハーバイラヴァとハヤカルナーがいる。[彼女は]糞便を運ぶ。ヒマーラヤである陰茎にはヴィルパークシャとカガーナナーがいる。[彼女は]毛髪の分け目の中央を行く。[以上の者たちは]以前と同じように、[四]緯に[置かれるべきである]。[彼女たちは]語輪の‘地を行く女’たちであり、[勇者たちと]結合しながら安住している。[36]

[外と内の身輪の完成]

ブレーターディヴァースイニーである性器にはマハーバラとチャクラヴェーガーがいる。[彼女は]つねに粘液を運ぶ。グリハデーヴァターである肛門にはラトナヴァジュラとカンダローハーがいる。[彼女は]つねに膿汁を運ぶ。両腿であるサウラーシュトラにはハヤグリーヴァとシャウンディニーがいる。[彼女は]血を運ぶと言われる。両脛であるスヴァルナドヴィーパにはアーカーシャガルバとチャクラヴァルミニーがいる。[彼女は]汗を運ぶ。[以上の者たちは]東を始めとする[四]方に[置かれるべきである]。

足の指であるナガラにはマラーリ [=ヘールカ] とスヴィーラーがいる。[彼女は]脂肪を運ぶ。足の甲であるシンドゥデーシェーにはパドマナルテーシュヴァラとマハーバラーがいる。[彼女は]つねに涙を運ぶ。足の親指であるマルにはヴァイローチャナとチャクラヴァルティニーがいる。[彼女は]唾液を運ぶ。膝であるクラターにはヴァジュラサットヴァとマハーヴィールヤーがいる。[彼女は]鼻汁を運ぶ。[以上の者たちは]以前と同じように、[四]緯に[置かれるべきである]。[彼女たちは]身輪の‘地下に住む女’たちであり、[勇者たちと]結合しながら安住している。[37]

[外と内の三昧耶輪の完成⁽²²⁾]

東門にはカーカースヤーがいる。北[門]にはウルーカースヤーがいる。西[門]にはシュヴァーナースヤーがいる。南[門]にはシューカラスヤーがいる。[彼女たちは]ダーキニーなど[と同一]の色と標識を持つ。[彼女たちは]全員、死体に乗る、炎によって燃え上がり、醜い顔をしている。女使者たちは右回りと左回りで安住している。東南にはヤマダーディーがいる。南西にはヤマドゥーティーがいる。西北にはヤマダンシュトリニーがいる。北東にはヤママタニーがいる。[彼女たちには]二つずつの魅力的な色がある。[彼女たちは]以前と同じように、死体に乗っている。[38-39]

[勇者と女神たちの特徴についての教示]

吉祥ヘールカなどの勇者たちは、手に金剛杵と鈴を[持ってその手でそれぞれの妃を]抱擁する。全ての女神たちはカルトリ包丁とカパーラを手に持ち、性愛などの情趣を保有する。[彼女たちは]死体に乗る、炎で燃え上がり、日[輪]に住し、踊っており、眼が三つあり、口を開いて牙を見せ、カパーラの環で飾られ、多くの光線を発してはもたらし、眉をしかめて波のようにうねった眼で⁽²³⁾見る。カーカースヤーなどと呼ばれる女たちは、虎の皮の衣をまとい、首飾りと冠毛と腕輪と金剛紐と耳飾りと頭の環のネックレスを[身につけている]。同様に、両足にグルグラーがある。そして[彼女たちは]プラティアリーダ座法で住する。[40-43]

上の二十四人の勇者たちは吉祥ヘールカの支分から生じる。二十四人の荼枳尼たちはヴァー

ラーヒーの子宮から生じる。[44]

[智サッタ引入・灌頂・供養]

次に、持金剛は智慧と三昧耶が結合したものであるとここで言われる。灌頂の住居を瞑想してから、続いて供養を彼は始めるべきである。というように、以前のように全て[の過程]がなされるべきである。[45-46]

[三十七菩提分法としてのヘルカ曼荼羅の完成]

今、神格との瑜伽によって、三十七菩提分法が安立させられるべきである。ダーキニーは身念住である。ラーマーは受念住である。カンダローハーは法念住である。ルーピニーは心念住である。プラチャンダーは欲神足である。チャンダークシーは勤神足である。プラバーヴァティーは観神足である。マハーナーサーは心神足である。ヴィーラマティーは信根である。カルヴァリーは勤根である。ランケーシュヴァリーは念根である。ドルマツチャーヤーは定根である。アイラーヴァティーは慧根である。マハーバイラヴァーは信力である。ヴァーユヴェーガーは勤力である。スラーバクシーは念力である。シュヤーマデーヴィーは定力である。スバドラーは慧力である。ハヤカルナーは定覚支である。カガーナナーは勤覚支である。チャクラヴェーガーは喜覚支である。カンダローハーは軽安覚支である。シャウンディニーは択法覚支である。チャクラヴァルミニーは念覚支である。スヴィーラーは捨覚支である。マハーバラは正見である。チャクラヴァルティニーは正思惟である。マハーヴィールヤーは正語である。カーカースヤーは正業である。ウルカースヤーは正命である。シュヴァーナースヤーは正精進である。シューカラーサヤーは正念である。世尊である吉祥ヘルカは正定である。ヤマダーディーは、まだ生じていないもろもろの善法を生じる[よう勤める]ことである。ヤマドゥーティーは、すでに生じたもろもろの善法を護る[よう勤める]ことである。ヤマダンシュトリニーは、すでに生じたもろもろの悪法を除去する[よう勤める]ことである。ヤマタニーは、また生じていないもろもろの悪法を生じない[ように勤める]ことである。

というように、世尊である持金剛は、三十七菩提分法の神格の清浄さを語る。[47]

[ヴァサンタとティラカーについての教示]

自分の心臓の中心にある蓮華は八葉であり、葯を持つ。その中央に住する脈管は胡麻油[で燃える]火を自分の姿としており、芭蕉樹の花のように下方を向いて垂れ下がっている。そ[=心臓の八葉蓮華]の中央にいる勇者は、芥子のうちの大きなものほど[の大きさ]である。[彼は]不壞なるフーン字という種[字]である。[それは]露のように流れる。[彼は]‘ヴァサンタ’と呼ばれ、身体を持つ者たちの心臓における、歡喜の[具現者]である。‘ティラカー’はヴァラーヒーであると理解される。[彼女は]ヴァダヴァーナラの姿をしている。業の風によって点火した[彼女は]、臍の曼荼羅で燃え上がり、‘ヴァサンタ’を得て満悦し、[‘ヴァサンタ’]と結合しながら安住する。これ[=‘ヴァサンタ’]は吉祥ヘルカなる勇者である。[二人が結合したものは]‘ヴァサンタティラカー’であると理解される。[それは]空性の姿となって、動・不動のものを内に持つもの[=宇宙]の中に安住している。[‘ヴァサンタ’]は身語心の区別による三種の門に出るとき⁽²⁴⁾、往來を

行う。これ [= ‘ヴァサンタ’] は全ての身体に安住している。[48-54b]

[四輪についての教示]

[ヴァサンタは] 臍ではア字の姿となって短い [音] であると言われる。心臓では、長い二モーラのフーン字であると言われる。喉ではオーン字の姿となって三モーラに延長されていると言われる。だが額では、これはハン字である。不壊のナーダ点、ビンドゥが [そこに] ある。[54c-56b]

四輪の区別により、地などの大元素がある。四つの時節に立って、四刹那より [ヴァサンタは] 生じる。四歓喜の姿に即して、[ヴァサンタは] 四瑜伽に専念する。行為対象と行為主体の [分かれた] 姿から、最も優れた歓喜の姿となって、吉祥なる金剛サッタの姿となって、[ヴァサンタは] 気楽にここ [= 身体] で戯れる。[56c-58]

[脈管についての教示]

四方にある四枚の花弁に安住する四本の元素の脈管は、胡麻油の火を自分の姿としている。[四] 緯に安住する四本の脈管はそれ⁽²⁵⁾に向かっている。それら [の脈管] は五甘露を運び、それへの供養の姿になっている。[それらは] 四供養であると言われ、あり方からしてまさしくその姿をしている。というように、身体の心臓の中央に八本の脈管が安住している。[56-61]

他のもろもろ [の脈管] として、身語心の区別によって、二十四本 [の脈管] が言われる。ピータなどの区別によって、それぞれの座に [それらの脈管が] 依拠している。以前のもろもろ [の脈管] と同じように、カーカーサーヤなどやパートナー [= ダーキニー] などとしてのもろもろの清浄な [脈管] がある。[62]

と、世尊である持金剛は印付けるために語る。[63]

[十個のもの (ドラヴァ) の観想]

始めにア字から生じた頭蓋骨に ‘[合計] 十個のもの’ を思念してから、燃やし、熱する風と火の曼荼羅を彼は作るべきである。最初の文字と結びつけられたものを瞑想してから、瞬時に [それが] 燃え上がる。反対向きの文字との結合を、タントラ [に説かれた] マントラを彼は観想するべきである。全て [のマントラ] はオーン字によって輝いている。三つのタットヴァが語られる⁽²⁶⁾。女神よ、このように観想するならば、[彼は] ものの成就という結果をもたらす⁽²⁷⁾。これによって瑜伽の成就があるだろう。縁が生じる。[64-66]

註

- (1) śeṣā は HAP のチベット語訳では thal ba 「灰」とされ (→ Note(I)), また CMP(32.3) には goṣṭhotpalikā bhasmaviśeṣaṇam / śuṣkaśireti . . . 「[‘牛舎の青蓮華’は ‘灰’の形容詞である。‘干からびた頭’とは . . .] (このように CMP は goṣṭhotpalikā caiva śeṣā śuṣka- と、śeṣā を śuṣka- とコンパウンドに考えていない) と記されているので、やはり「灰」を意味する女性名詞であるとも考えられる。「残余物」すなわち、残ったもの=灰というのはイメージ的にもつながる。
- (2) śirā は śīro [= śīrah] のかなり古い時期からのコラプションであろう。ところでテキストでは śirāstrataḥ [= śīro'strataḥ] としたが、括弧の中を śīro'strataḥ と非コンパウンドに訂正したい。次

注で詳細を述べるが、この段は四大輪形成を説いた部分であり、その順序からすれば、それをコンパウンドでとらない方が良いと思われるからである。

さて、もともと HA に端を発する表現である *śeṣāśuṣkaśirā-* は、*śeṣā + śuṣka-*（この場合は「干からびた頭」）と解する場合と、*śeṣā + aśuṣka-*（この場合は「濡れた頭」）と解する場合の二通りの可能性がある。前者のケースは HAP に見られる（→ Note(I)）。後者のケースは、もし *śeṣā* を「灰」と解するならばそれはイメージとしてむしろ「火」であるので、*aśuṣka-*「濡れた-」=「水」とバランスが良い。もし HAP のように前者の立場に立つならば *śeṣā* と *śuṣka-* はコンパウンドである必然性がないが、後者の場合もあり得ると思われるので、テキストは一応コンパウンドにした。次注も見よ。

- (3) HAP によれば、「矢」は風輪、「干からびた頭」は火輪、「残余物[あるいは灰]」は水輪、「牛舎の青蓮華」は地輪、「大貝より成るもの」は須弥山である（→ Note(I)）。「亀」は金亀、「壊れざるもの」は羯磨金剛杵と雑色蓮華であると考えられる（CMP には *anilānalavāruṇamāhendrakacchapaviśvavajraviśvapadmo-pari saptakulaparvatapariveṣṭitamruparvataṃ dhyātvā* [48.2] とある）。もし「干からびた頭」を「濡れた頭」と解するならば、「残余物[あるいは灰]」は火輪、「濡れた頭」は水輪となる。前注も見よ。
- (4) ここで生起する勇者が金剛サッタと呼ばれるものであることは、この後に続く文章の内容から推測できる。また注(13)も見よ。
- (5) テキストでは *yāval lakṣabhujam* としたが、*yāvallakṣabhujam* とコンパウンドに訂正したい。
- (6) *kapālaṃ cārghapātraṃ ca* を素直に訳せば「カバーラと闍伽水の器を[持ち]」になるのだが、Note (II) に挙げた HA において *kapālārghapātraṃ* 「カバーラとしての闍伽水の器を[持ち]」となっていたように、最初の *ca* は後代のコラプションであり、もともとはコンパウンドであった可能性が考えられる。現に世尊の四本の手の持ち物として既に金剛杵と鈴とカトヴァーンガ杖が挙げられているのだから、持ち物はもう一つだけあると考えた方がすっきりする。故に、文字通り「カバーラと闍伽水の器」というように持ち物を二つに分けず、「闍伽水の器であるカバーラ」と訳した。なお、闍伽水の器としてカバーラが用いられるのはこの伝統では決して奇異なことではない。
- (7) Note (III) の HA のように、「最初の成就の-」(*ādisiddhi-*) はもともとは「初めから成就している-」(*ādisiddha-*) だったのだが、このコラプションは後代しばしば継承されたと考えられる。たとえば、*Samvarodayatantra* でも *vihāracaityālayalayne maṇḍape śucibhūmiṣu / ādisiddhi-śmaśāne ca tatra maṇḍalam ārabhet* //(17-5) となっている。
- (8) 「山」、「密林」、「薮」、「大海の岸辺」、「最初の成就の尸林」は全て子宮の比喩表現でもある（→ Note(III)）。少なくとも HAP, VD, CS の類似伝統内では、元来曼荼羅を描く具体的な場所を単純に指定するこの文言を、子宮の中に曼荼羅を観想するという意味でも用いる傾向がある。
- (9) 「金剛鎖」は和合になる[→を生じる]というように訳したのは、次注で見るように、ここでは「金剛鎖」は和合をあらしめるものであり、和合になる（あるいは和合である）ものではないからである。Note(IV) に記したように、この文言のもとになると思われる文章は HA に登場するのだが、HA では「和合になる」の意味で文脈上よかつたのである。Note(IV) を見よ。
- (10) HAP によれば、「和合」なる用語は般若方便合一を、「金剛鎖」は二本の手による抱擁を意味する。「金剛杵」によって「蓮華」を彼は貫くべきである」は、勇者の男性器を般若の子宮に挿入することを意味する。「孔雀の羽」は *madhukara* 「(普通名詞の蜜蜂ではなく) 蜜を作るもの」であり、すなわち精液を作る（保持する）男性器ないし精液を作る頭頂部 (HAM 字) であると考えられる。「鉤」とは性愛の鉤であり、これによって全ての如来たちを「引き寄せ」る。「杵」は勇者の男性器を表わす。VD によれば「杵」で震わすことは世俗の全ての存在を破壊することも意味する。「金剛」と呼ばれるものとは先に引き寄せた如来たちであり、その如来たちを「口」すなわち *melaka*

「集合、会合」の中に広げる。(→ Note(IV))。melaka が動詞語根 mil「会う、集まる」に由来していることと文脈の流れからして、melaka はおそらく具体的には般若の子宮と勇者の男根が出会っている場所、すなわち般若の子宮に挿入された勇者の男性器の先端（あるいは、勇者の男性器が挿入された般若の子宮の内部）を表わすのだろう。以上の文言は、勇者と般若の性瑜伽によって一切如来たちが勇者と般若の接合部に安立する過程を述べたものと考えられる。VD も同様の解釈をしている(→ Note(IV))。

また HAP は「和合」「和合になる」はララーナーとラサナーであり、「金剛鎖」はその縛によりララーナーとラサナーを上門でつなげるものという解釈も述べている。(→ Note(IV))

- (11) 以下でも見るように、HV でも CS でも「液体になった」は慣例的に中性形となる (dravibhūtaṃ) が、意味としては男性形 (-bhūtaḥ) である。テキストに [= -bhūtaḥ] を付け加えたい。

Note には記さなかったが、「射矢」と結びつけてから、[勇者は]明妃とともに液体になった」は HV (II.v.19ab) の tato vajrī mahārāgād drutabhūtaṃ savidyayā「次に、持金剛は大貪欲より、明妃とともに液体になった」と内容的に一致すると考えられる。したがって、「射矢」と結びつけてから」は「大貪欲より」と同内容であり、性瑜伽の恍惚が深まることを意味すると思われる。

このくだりは‘液体になった主’という、タントラ類にしばしば見られるモチーフに通じる。ここでは、勇者と明妃は法身としての液体になり、一切の活動を停止する。したがって、次の段階では、仏たちは液体化した勇者と明妃を勧請し、再び活動を開始させねばならないのである(→テキスト [17])。Note(V) に記したように VD はもちろん、HV も上の文に続いて codayanti tato devyo nānāgītopahārataḥ「次に女神たちは様々な歌や贈り物により [持金剛を] 勧請する」と記している (II.v.19cd)。

- (12) dharmakāyaṃ を、前行の dravibhūtaṃ に単純に影響されただけで実際は dharmakāyo[=-yah] であるところでは解した。「法身のようにある」もの（すなわち法身そのものではないがそれに類するもの）とは、(本文には明記されていないが) 先の持金剛と妃が液体化したものとしての菩提心であると思われる。なぜなら、本文では続いて仏たちの勧請によってその液体状のものからヘルカとヴァーラーヒーが「誕生の規則の順序通りに」成長するからである。

- (13) 「私」とはここでは液体化した主を指す。この箇所は Note(V) に引用した VD の文章と関連が強いと思われるが、VD では「私」は文脈上、最高神＝金剛サッタを指している。

- (14) テキストでは Tib. の読みを採用して -mantrāt としたが、写本のトランスクリプトである -mantra に近い -mantraḥ に訂正したい。verse 17 の d の箇所である yathodayavidhikramaiḥ を verse 18 の文にかけて読むならば、当該箇所は -mantraḥ の方が良いと考えられるからである。

- (15) 文字通りに考えるならば「マントラを双方の性器に結びつけてから (saṃyojya)」と訳すべきだが、その内容はア字を‘人の鼻’に、ヴァン字を勇者の性器の先端に布置することに他ならないので、「結びつけるべきである」と訳して文を切った。

- (16) ‘人の鼻’とは、ここでは般若のバガを指すと思われる。なお「人の鼻」という隠語は HV にも登場する。devīm vai gāḍham āliṅgya kṣiptvā bolaṃ kapālake / gāḍham kucagrahaṃ kṛtvā saṃvṛṣya naranāsikāṃ //(II.vi.1), cumbanāliṅgaṃ kṛtvā bhagasparśan tathaiva ca / vṛṣaṇaṃ naranāsāyāḥ pānam adharamadhusya ca //(II.xi.12)。

- (17) 「‘世俗を離れた住居」とは顔にある第三の眼を意味する(たとえば CMP 34.1)。「最初の音と結びつけられたもの」とは A 字のある「何か」(曼荼羅がその上に生起するもの、詳細は不明)である。Note(VIII) も見よ。

- (18) この段の文章だけを見ると、外の大楽輪の観想のみを説いているように一見感じられる。しかし、前段の、茶枳尼たちを「脈管の道」に布置する旨の文章や、テキスト [59][60][62] の箇所の文章(大楽輪の四茶枳尼や四緯のカパーラおよび三昧耶輪の八茶枳尼の脈管を説く。後に記す訳を見よ)か

ら判断すると、やはり内の大楽輪の観想も意図していると考えられる。この場合、「東」「北」といった方角は心臓の蓮華のそれぞれの方角の葉を意味していることが予測される（テキスト [59][60] の訳の箇所を見よ）。後に登場する三昧耶輪の荼枳尼たちの場合も同様である。

- (19) CS には直接記されていないが、HAP にはそれぞれの聖地の種字（各聖地の名称の頭文字に *m* を付したものが記されている（→ Note(X)）。
- (20) テキストでは *vikāṭadamṣṭrīna-* としたが、*vikāṭadamṣṭrī* に訂正したい。
- (21) テキスト作成の際に使用した諸資料が全て *pārśva-tantu-samākhyātā* を支持していたので、写本のこの箇所のトランスクリプトをそのままテキストとして採用したが、あるいはこれは *pārśvatas tu samākhyātā* の古い時期からのコラプションかもしれない。その方が意味がすっきりする。今回の拙訳では後者のつもりで訳している。したがってテキストを *pārśvatantu-[= pārśvatas tu]* としたい。
- (22) 注 (18) を見よ。
- (23) テキストでは *-kuṭīlakarākṣa-* としたが、*-kuṭīlakākṣa-* に訂正したい。
- (24) Note(XII) にも記したように、この段は同名の著者に帰される *Vasantatilakā* にも（多少の相違はあるが）登場する。同書によれば、「身語心の区別による三種の門」のうち、身の門は粗大な一本の支柱と九つの門 (*Rahasyadīpikā* によれば支柱とは背骨、九つの門とは両眼・両耳・両鼻（の穴）・口・秘密・肛門）、語の門は上・脇・まっすぐ・下に関する火・風・地・水 (*Rahasyadīpikā* によればそれぞれ喉・臍・秘密・心臓の座)、心の門は入/下降と出/上昇に関する左右の脈管である (3.2-7)。
- (25) この「それ (*tat*)」が何を指すかは不明瞭であるが、「それへの供養の姿」という表現から、供養対象すなわち世尊=ヴァサンタであるとも考えられる。
- (26) *Bhavabhadrā* の *Śrīvajradākanāmamahātāntrarājasya vṛtti* によれば、「十個のもの」とは *BRUM AM JIM KHAM HŪM OM HŪM OM ĀḤ HŪM* (最後の三つは「三つのタットヴァ」) の十文字である。「最初の文字と結びつけられたもの」とは *OM* 字が布置されたカパーラである。(以上、Ota.91a4-a7)。「タントラ [に説かれた] マントラ」とはヘルカのフリダヤマントラないし全てのマントラであり、それを「反対向き」に（すなわち）末尾から唱える (Ota.92a1-a3)。
- 同書の説明に従ってこの段の観想のプロセスを簡潔に述べれば以下のようになる— まず *YA* 字から風輪、その上に *RA* 字から火輪を観想し、その上に *A* 字からカパーラを観想する。そのカパーラの中に *BRUM AM JIM KHAM HŪM* 字から毘盧遮那などを自性とする五甘露を生じ、その上に *OM* 字を置き、虚空中に *HŪM* 字より生じた金剛杵を観想する。次に風によって火輪の火が燃えあがる。その熱で金剛杵が溶け、それがカパーラの中に滴り落ちたら、*OM ĀḤ HŪM* の三文字で加持する。更に引き続き火によってカパーラの中の甘露が燃えたなら、成就が生じる。(Ota.91a4-a7)
- 反対向きのマントラについての文言は、*VD* では上記の観想とは別の観想の際に登場する文言であり、*Bhavabhadrā* はそのつもりで注釈している。よって上述の観想とこの反対向きのマントラのことか *CS* の中でどのように結びついているのかは現段階では不明瞭である。マントラを反対向きに唱えながら上述の観想を行うのだろうか。あるいはマントラもまた反対向きにカパーラないしはどこかに顕現させるのだろうか。
- (27) 「ものの成就という結果をもたらす」*dravyasiddhiphalapradāḥ* は写本のトランスクリプトをテキストとして採用した。*Tib.* や関連文献もこのコンバウンドを支持しているからである。しかし、文脈的には *dravyasiddhiḥ phalapradā* 「[上述の] ものの完成は [彼に] 結果を与える」、あるいは *dravyam siddhiphalapradam* 「[上述の] ものの成就という結果を与える」の方が意味がすっきりするようにも思われる。